

「言葉」・「表現」活動から地域文化の継承について考察する（１） ～保育を専攻する学生の民話絵本作り・発表～

久保木 亮 子

Discuss the inheritance of regional culture from“words”・“expression”activities (1)

～Students majoring in childcare making folkloric picture book making and announcement～

Ryoko KUBOKI

要 旨

保育を専攻する学生が、「言語」・「表現」活動に関わる学びから、①乳幼児期の親子、地域の人々との関わりを通して、保育実践の中で地域文化の継承が必要であるととらえているのか。②保育所・幼保連携型認定こども園・幼稚園の保育、教育の中で実践するのは難しく困難だと考えているのか。③子どもたちに地域文化を継承していく意義や効果から育つものは何なのか。④それらを伝える保育技術、参考文献などはあるのか。などの問題と向き合い標記の考察を行う。

そこで民話の歴史を研究しながら、学生たちの居住する市町村の民話の掘り起こしを行う。１グループ４～５名とし、５グループを作る。各グループで一冊の民話絵本を作成する作業から、読み聞かせや作品発表までの一連の流れを通して、地域文化の継承が保育実践の中で可能であり、重要であることを考察する。

キーワード：「言葉」、「表現」、民話、文化の継承、保育実践

はじめに

昭和50年代（1975～1984）頃から「民話」と言う言葉が使われるようになった。全国的に民話人気が高まり、数々の書籍などが出版されるようになり、ラジオなどのメディアにも取り上げられるようになった。しかし、第１次ベビーブーム、高度経済成長期を迎えテレビが一般家庭に普及されるようになると娯楽性の高い番組がもてはやされ民話ブームは影を潜めることとなった。

『広辞苑（第六版）』では、「民話は民衆の中から生まれ伝承されてきた説話、民譚（みんだん）」と説明されている。そのほかの辞書・辞典類を見てみても「人々の生活の中から生まれたもの」、そして「口伝えて語り継がれてきたもの」、これらの２点が共通していると記されている。

昨年度から保育を専攻する学生に「言葉」・「表現」活動から地域文化、生活の継承として民話絵本の読み聞かせを行っている。本年度は、更にその活動や学びから発展させ、学生たちに自分の育った地域（町）に愛着が持てるように民話の掘り起こしを行い、地域の歴史や文化に興味関心を持ち、郷土愛を基盤として子どもたち、保護者、地域の人々との関わりを通して、地域と繋がり、地域に必要とされる保育所、地域に根差した保育をしてほしいと願っている。

では具体的にどのようにして取り組んでいけばよいのかを授業で話し合い、各学生の住んでいる民話の掘り起こしを行い、民話の絵本作りへと展開することにした。

1 グループ4～5名編成のグループ5つで民話絵本作りスケジュールを作成させる。(題材選び、時間配分、役割分担、素材研究、工夫のポイント、読み聞かせ練習等)の管理は学生たちに委ねた。そして、民話絵本の読み聞かせ発表後には、他のグループからの学びや今後の課題などを記入することにした。

教員は取り掛かりに戸惑っているグループには適宜相談にのり、学生の抱えている困り感や問題点を丁寧に助言していきながら方向性を示していった。

また、民話についての認知度や民話絵本作りスケジュール管理などについてのアンケート調査結果(22名の学生)などからも考察していきたい。

授業展開から具体的な事例を下に取り組みを述べる。

1. 言葉・表現活動から民話絵本を知る

一般的には、童話や乳幼児向け絵本、素話などを絵本と定義している。それほど民話というものが知られていない。民話絵本を見たことがない、読んでもらった記憶がないと答える学生が大半である。ではなぜ、そのような認知度の低い題材を取り上げるのかを考察していきたい。

武田 正(2001)は『今昔物語』は「今は昔」で始まる。その流れで、民話は「むかしはあったけど」で始まるのは、全国どこでも同じである。聞き手の子や孫が、語り手の祖母に「もっと語れ」とせがむのを、柔らかく拒否する意味をこめて「これで今夜の語りは終了する」と言う意図を持って、少しずつ結びの句に言葉が加わることが見られる。と、民話講座(1)結びの句の地域性で述べられている。ここに祖母から孫へと語り継いでいく民話の醍醐味がある。民話には、それぞれの地域の歴史や風習、文化がうかがわれる。いま、この文化や歴史、風習が忘れられ、そのともし火が消えかけている。

昔、電気などのなかった頃、乳幼児が母のおっぱい欲しさに囲炉裏端に近づくのは、大変危険であった。台所の隅の掘りコタツに祖母が孫達を集めて、昔話を語りながら聞かせてくれていた。乳幼児が飽きないように、語り口調を変えたり、表情を変えたりしながら、しかもなるべく長い昔話を語ったものである。乳幼児が語りに飽きて、囲炉裏端の母のところへにじり寄って行ったりすると、「しっかり語らねがら、子どもが騒ぐ。しっかり語れ」と祖父の怒鳴り声が降ってきた。民話講座(14)このような光景が全国いたるところで見られたものである。

松谷みよ子(1974)は、「民話の世界」から民話との出会い～山を越えて～で、民話の世界は山脈のように大きく懷は深い、私は日本について何を知っていたのか。と記述している。上記の民話研究者二人から、家族の営み、古きよき時代のかかわりから、現代の生活の中にも伝承されている文化がどのように表現され、どのような形で存在し、推移されてきたのかを次世代に伝えていきたい。そのためには、保育を専攻する学生に民話の存在と意味を知り、学びを深め、就学前保育・教育に関わる保育者(学生)が子どもやその保護者、地域の人々に伝え、乳幼児期からできることから取り組んでほしいと願っている。以上から要旨①・④についての問題解決及び保育実践が可能になると考えられる。

保育所の生活の中で、保育者からの絵本の読み聞かせは子どもたちにとって嬉しい時間である。その絵本タイムに様々な絵本の読み聞かせを行っている。その中に民話絵本の読み聞かせも取り入れ、自然に民話が身近な存在となって子どもの心に伝わり、家族の共通の話題となり地域文化がどのように継承されてきたかを感じることができる。また、保育者にとっても民話絵本の読み聞かせが特別なもの、難しい保育、苦手なジャンルであるという認識が薄れていくのである。

2. 地域に伝わる民話を通して

高砂市（１）明石市（２）、神戸市（13）、芦屋市（１）、西宮市（２）但馬地区（３）に居住する学生がいる。（ ）は学生数である。

まず、各学生が地元の民話を収集することにした。保護者や地域の人に話を聞き収集するものと思っていたが、保護者も民話という言葉を知らない、聞きなれていないためインターネットで調べるのが一番多く、続いて図書館で調べていた。（アンケート調査結果より）

この結果からも民話の認知度の低さ、人から話を聞く、話し合うという行為がなくなっていることがわかる。

収集した民話を持ち寄りグループで紹介し合ったり、読み聞かせを行ったりする中で、民話の内容が地名の由来になっていたり、少し怖い話であったり、ユーモラスな話があったりして、昔の生活が分かったり、楽しさや不気味さを味わったりなど、言いようのない不思議な感覚を味わった。その思いは何なのかを追求するのが目的ではなく、一人ひとりの学生が感じる思いを大切にすることを伝えた。人はついつい答えを求めたくなる。人の生き方、文化の流れには答えがないということ、その時々を受け取り方を楽しんでほしい。

そして、グループで話し合い、四～五話の民話の中から一話を選出して協力して民話絵本作りに発展させる。

3. 民話の絵本作りを通して（協働作業）

授業の３コマを使い、共同で作業を行う。絵本の土台となる本は、既成のものを使用する。

〈地域の民話の掘り起こしと教材研究及び民話の絵本作り〉実際に作ってみよう！！

- 1、題名（ ）参考文献を明記する。
- 2、準備物
- 3、日程（スケジュール）
- 4、役割分担
- 5、工夫のポイント
- 6、発表の仕方
- 7、民話絵本の読み聞かせの練習
- 8、他のグループから学んだ点
- 9、考察（今後の課題）

以上とし、３コマ終了時に記入して提出する。

学生たちは自分の得意な分野を活かし、絵を描く、色を塗る、ストーリーを整理する、切り紙をする、仕掛け作りをする、読む文を書くなど話し合い分担がされていた。しかし、意欲的に取り組めない学生、（誰かがするであろうと考えている）に対しては、保育現場においても保育者間の協働の大切さや、自分の得意なものが何であるのかに気付いてない学生には、どのあたりで戸惑っているのかを教員が聞きだしたり話し合ったりして、学生自身の特性や長所などの気づきや意欲向上に繋げていった。上記の分担の中でその学生が協力できる分野の指導も行った。作業をしていくうちに「昔の話やのに、油性マジックで描くのはおかしいと思うわ」「でも、この本の台紙やったら仕方がないんと違う?」…。「でも、おかしい」「雰囲気壊れるわ」…。様々な意見が出て考える学生たち。

「別の紙に筆ペンで描いて貼ったらええのと違う?」「ほんまや、ほんまや」…。「色塗りは、うすーい色でぼかす様にしたらええんと違う?」など、様々な工夫がされた。また、民話の内容によっては、飛び出しの仕掛けや、切り紙、金色や銀色の折り紙を使い、華やいだ作品に仕上がってきた。そうなる各グループが競い合いヒートアップしていった。

民話絵本作りから学生たちが協働の大切さを自ら感じ取り、深い学びに繋がっている。

これらの活動から民話絵本作りの上記スケジュールNo.5、8などに学生たちの会話からうかがえる内容の記述がみられた。これらの活動から要旨②・④で抱える学生たちの困難さが解決されると考えられる。

また、民話の世界観が広がるように、松谷みよ子（1960年）「龍の子太郎」のスケールの大きい話や高砂市に伝わる民話「ヨーイヤサーとてんじんさん」・「そらとぶこめだわら」の絵本の読み聞かせを教員から提供され、先人の生活の営みや地域に伝わる慣わしなどを学生たちは身近に感じる機会となった。そして、現場の保育者が実践で行っている保育の一コマが想像できたように感じる。

これらの協働作業を通して、今まで授業では知りえなかった学生たちの個性や特技、座学での学びでは知りえない姿に触れることが出来た。また、3コマの授業では追いつかず、自主的に集まって絵本作りにはげむ姿などに触れ、学生が民話を理解しようとする学びへの意欲を知る機会となった。

〈協働作業風景〉



* 筆者撮影：写真掲載学生 了承済み

4. 民話絵本の読み聞かせを通して

グループで協力して発表を行う。より良い民話絵本にしたいという思いが高まり作業に思いのほか時間がかかり（嬉しい悲鳴である）、読み聞かせの練習があまりできなかった。しかし、学生たちは作業をしていく中で、絵と文章が適切か、ページ数に合わせるにはどのように構成していけばよいのかなどを話し合ったり、考えながら進めていたので内容は十分に理解できている。話の内容や短い民話などのグループは余裕をもって作成していたので、仕上がったグループ順から発表する。発表以外のグループは、子ども役になって他のグループの読み聞かせを聞くことにした。さながら保育実習（保育実践）の場となり、教室の大きさ、聞く人数に合わせて声の大きさやトーンの調整なども行っていた。聞きなれない昔の言葉に苦戦したり、緊張してたどたどしい読み聞かせになっている学生、練習不足を感じる学生もいた。

他のグループの発表を見たり、聞いたりすることで作成上の工夫（素材選び等）や読み聞かせ技術などを学ぶ機会になった。それらの学びや気づきから保育者になった時には、保育現場で子どもを前にして読むこと、保護者や地域の人々に読み聞かせをすることを考え、繰り返し読み聞かせの練習が必要であるこ

とに学生たちは気づいた。

今回の発表だけで終わってしまうと、自主的に学生たちが読み聞かせをしなくなってしまう可能性がある。なので、引き続き毎授業の終わりに1グループずつ読み聞かせをしていくことにした。この経験から民話絵本を身近に感じ、親しみ好きになり、素話として話せる力をつけて自信をもって民話を広げていく力が身についたように感じる。

〈民話絵本の読み聞かせ風景〉



* 筆者撮影：写真掲載学生 了承済み

5. 結論と今後の課題

民話は特別な活動ではない。ただ、どのように保育に活かしていけばよいかが学生たちにも、現場の保育者にも理解されにくい。参考資料、教材、耳慣れない、出会いがないと言える。

以下に学生たちの絵本作成アンケート調査からの結果を明記する。()内は調査人数である。

- ・地域の人に民話を知ってほしい。自分の生まれ育った場所を好きでいてほしい(5)
- ・民話は自分の生まれ育った町の歴史や文化に触れる良い機会だと思いました。生まれた町の話なので親近感があり、面白いと思ってもらえると感じました(1)
- ・自分の生まれ育った場所をもっとよく知るために(5)
- ・自分の育った地域のことを知り、地元を好きになって後世につないでもらう(2)
- ・いろいろな地域のお話に触れて何かを感じてほしいから(2)
- ・昔のことを知ることも大切なことで自分の住んでいる所ではこんなことがあったのかという発見や面白さがあるから(1)
- ・小さい頃に紙芝居で読んでもらった経験があるので民話を大切に広めていくとよいと思う(1)
- ・怖いエピソードばかりだった(1)
- ・子どもには難しいと思う(2)
- ・高齢者の方に読むのは懐かしいかもしれないが子どもには難しいと思う(1)
- ・文章や絵が難しかった(1)
- ・授業では出来たが、保育所では他の保育士が知らないと思うので無理かもしれない(1)

という、結果が出た。

難しいと感じている学生が2割いるが、その他の学生は民話の掘り起こしから絵本作り・発表経験から自分の住んでいる町の良さを再発見し、次世代に伝えていくことの大切さを感じ取っている。子どもには

難しいと思うのは、学生が民話と向き合う難しさを感じているようにも考えられる。どのようにすれば苦手意識から挑戦しようと思えるかを学生たちと考え、授業が終了しても定期読み聞かせ会を開催していく。

また「授業では出来たが、保育所では他の保育士が民話の存在を知らないので実践できないと思う。」と述べている学生の意見が目に残った。確かにこの問題が大きいように感じる。一人の力は小さいが、生きることのたくましさ、昔からの普遍的な生活の営みなどこれらを次世代に伝えていくことで見えてくる世界観がある。人でしか出来ない事柄、文化の継承を保育の中で実践できる手段がある。まさしく民話を語り継ぐことであると考ええる。

一冊の本は、自分が読んでの宝物。親になっては子どもの宝物。祖父母になった時には孫の宝物。そうやって語り継がれる民話物語の持つ力は、心を育てる宝物であると思う。民話の普及を図るためには、就学前保育・教育の現場から発信し、中学校区から自治体までつなげ民話を身近に感じ、地域の文化、日本の文化に誇りを感じられる子どもたちを作っていくことが私達の使命である。

そのためには、保育士養成校（大学・専門校等）において、学生たちに「言葉」・「表現」活動の授業の中で民話の存在意義を知らせ、まずは、学生たちの住んでいる地域の民話の発掘や、全国に伝わる民話や参考文献などを紹介し、民話絵本作りや読み聞かせが特別な保育ではなく、保育実践の中で地域文化の継承が自然な営みであり日々の保育活動の中に位置づけられるようにしていきたい。以上の観点から要旨③の意義を理解し、校種間で連携しながら取り組みやすくなると考えられる。

要旨に挙げる①②③④の問題が学生たちの意識に根付くまで、保育士養成に関わる教員が協働して授業展開していきたいと考えるが、保育士養成にはたくさんの学びが課せられている。よってその体制作りが今後もっとも難しい課題になると考えられる。

〈学生たちの民話の絵本作品〉



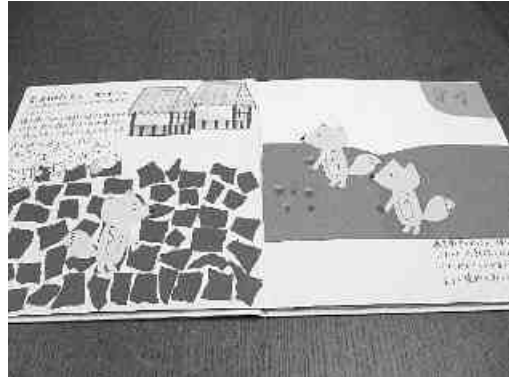
* 筆者撮影



上段：打ち出の小槌
下段：こころやさしい天狗



上段：おとくさん
下段：ほらくらべ



権兵衛きつね

学生による民話絵本作成に関する参考文献

参考文献：「おとくさん」 有馬温泉 元湯 龍泉閣

：「ほらくらべ」

丹波、篠山の民話

：「打ち出の小槌」

芦屋市打出小槌町 あしやの民話

：「権兵衛きつね」

小野市の民話

：「こころやさしい天狗」

神戸市中央区の民話

参考文献：武田 正 民話研究センター会報「民話」

民話講座（１）結びの句の地域性

民話講座（１４）広く深い民話の世界

～柳田国男から現在まで～

松谷みよ子 民話の世界（講談社新書）、龍の子太郎（講談社）

高砂市史 播磨風土記 「ヨーイヤサーとてんじんさん」（そねのみんわ）

播磨鑑 増訂 印南郡誌「そらとぶこめだわら」（よねだのみんわ）